



エコ・レポート5
環境問題の現場から

海辺から環境教育を 考える人、集合！

海に興味のある人、海が好きの人、
環境教育に関心のある人……

80名を超える人が、
全国から三浦ふれあいの村に集まった
なぜ「海辺」の環境教育なのか？

誰でも参加OKの
ゆるやかな
ネットワーキング

07年3月2、4日、神奈川県立三浦ふれあいの村で「海辺の環境教育フォーラム2007」が開催され、NPO関係者、学校教育関係者、ダイバー、事業者、行政、一般市民、研究者、学生等々、さまざまな立場から80名を超える人が集まった。海や環境教育に興味がある人なら誰でも参加できることとあって、同じ釜の飯を食いながらのディスカッションは、世代や職業を超え、どこかほろめキャンツのような雰囲気も持っている。07年3月に始まり、今年で7回目を迎える同フォーラムは、全国各地いろいろな場所で活動している人が年に1度顔を合わせて情報交換する、ゆるやかなネットワーキングとしてすっかり定着した。



「コラボボード」と名付けられた掲示板には、各々がメッセージを書き込んで情報を発信

「環境保全にとどのよう
貢献できるのか？」の2つを軸に
日頃から取り組んでいる成果の発表や、
事例紹介をし、各人が抱えている課題や
疑問のヒントを探った



01 毎月1度開かれてきた「海辺の環境教育フォーラム」は、今年で7回目。初の関東での開催で、全国から80名を超える人が集まった。02 開催初日のアクティビティの1つ。相模湾での釣り。03 小網代の森自然観察会。海と森のつながりを見学。04 海辺ラボBの海辺アートの一側。ガムテープに貝殻などを貼らせて、そのままを全体にかぶせたもの。誰もが目撃にできる海辺遊び



05 三浦ふれあいの村に隣接する和松長浜でのビーチクリーンアップ。大きな刺し網を回収し、06、クリーニングに参加した人がキーワードを出し合って作成。事前を用意していたマップ・ミュージック「クリーニング」にあわせて合唱。07 フォーラムの半分以上の時間が発表やされた海辺ラボ



08 全国コンペで最多投票を得た浪崎女子大。(OWS)の企画賞。タイトルは、「サンゴの危機を止めます」。09 最終日の午後の全体会。各ラボでもとりまとめられた発表や活動内容を発表し、

海辺の環境教育フォーラムとは？

「海辺」から「環境教育」を考えたい……そんな思いの人たちが集い、交流する場として、自然教育研究センター 吉瀬浩史氏、日本安全潜水教育協会 山中康司氏らが発起人となって、01年3月、西伊豆・安良里で第1回を開催。以降、安良里の他、石垣島や高知県室戸等で開催されてきた。関東での開催は今回が初めて。毎回有志スタッフがより運営されている。来年は、兵庫県の家島「島と子島」での開催が見込まれている。



フォーラム2007
Marine Environmental
Forum 2007

海辺の環境教育フォーラム2007 水先案内人（実行委員）五十音順

伊藤 久枝（海の環境教育NPO bridge）
小笠原 悠一（産業技術総合研究所）
小島 あずさ（LEAN/クリーニングアップ全国事務局）
こばやし まさこ（海遊びライター）
座間吉成（日本ライフセービング協会シニア教育委員）
土川仁（コラル・ネットワーク）
浪崎 直子（特定非営利活動法人OWS）
吉瀬 浩史（自然教育研究センター）
宮本 育島（コラル・ネットワーク）
山中康司（NPO法人日本安全潜水教育協会）
渡辺 未知（海辺のインタープリター）

環境教育は、学校だけでなく、地域や観光業、レジャーなど幅広い分野や団体も連携して展開している。しかし、陸域に比べて、また海城の施設やプログラム資料などが少ないのが現状だ。日本、そして世界でつながっていることを教えることができる。このフォーラムのように、立場や地域を超えて、情報交換や連携が、海辺の環境教育の新たな発展の礎になっていくことが期待される。

海辺ラボA「サンゴ礁保全のための環境教育」で発表されたユニークな提言の一部

- 沖縄土産「サンゴちゃんそう」&「オニヒトデまんじゅう」の考案。濃い淡色から白色にグラデーションになったまんじゅうが並び、サンゴの白化について一目でわかる。さらに、「オニヒトデまんじゅう」も作り、サンゴちゃんそうに乗せると、沖縄のサンゴ礁の現状がよりわかる。ただのお土産品にとどまらず、サンゴ礁の海について、非土産品の人たちにも知ってもらう。
- 電力会社に協力してもらい、先月や昨年と比較してどのくらい節電ができたかを請求書に示してもらい、それらに応じて得点が貯まる。エコポイント制度などを導入する。
- サンゴ礁の解説員、サンゴレンジャーの立ち上げ。
- サンゴ礁年を都民部でアピールするための「1、2、3コゴ少年」プロジェクト。少年のキャラクターを作り、テーマソングやロゴマークを作ってサンゴ礁年の広報活動をする。全国の水族館で一斉にパネル展示。学校の授業にも取り入れる。400種ほどのサンゴなどのフィギアが番号付いてくる「選りサンゴ」を創刊し、すべてを集めると生感系が見えるジオラマが完成する。
- 一般を対象にした「サンゴ留学」。学生を対象にした「サンゴ交換留学」。たとえば昆布の海北海道と、サンゴの海沖縄の学生同士との交流やそれぞれの地域に滞在しよう。
- インターネットからダウンロードできるように、オープンソースの教材を開発する等々

今年最大の特徴は、2泊3日の行程中、「海辺ラボ」の活動に約1日半、フォーラムの大半の時間が費やされたことだ。開催初日、相模湾でのシーカヤック、小網代の森自然観察会、相模長浜ビーチクリーニングアップなど、施設周辺の自然の中でアクティビティを通じて参加者同士が交流を深めた後は、3つの海辺ラボに分かれてグループワークを行った。それぞれのラボのテーマは、「サンゴ礁保全のための環境」など、動の映像を撮影し、サンゴ教育プログラムに組み入れようというもの。サンゴの危機が強調されるあまり、動物であるサンゴの魅力がどうおぼんじりかたに思いつかないのでは」と感じたことから発表に至った。売上金10万8512円が渡されると、来年のフォーラムで映像をお披露目したいです」と笑顔で話した。

最終日の全体報告会では数多くのユニークで具体的な提言が発表された。具体的に上がったプランの一部は左記のとおりだ。特定地域の環境問題について、遠隔地も巻き込んだ活動にするにはどうしたらいいか、環境教育の果たす役割は？ など、サンゴ礁をモデルケースに、今後、干潟、藻場などへも発展できるであろう、興味深い考察があった。

海辺ラボでは、誰でも楽しめる

今年初のチャリティオークションを実施

さらに今年初の試みとなったのは、各人が持ち寄った品々を参加者同士で競り落とすチャリティオークションだ。売上金はボスタワーセッション「海辺の掲げ板」に掲げら